

と。三時間位しないと次の駅には着かない。車外を眺めると荒涼たる原野に白樺林、みんな自分の行末を安じ静まり返っていました。しかし、日が経つにつれ落着きを取り戻し演芸会が始まりました。日本各地から集まっただけあって芸者が多く、演歌・民謡・講談・怪談と、本職顔負けの芸で時間の過ぎるのも早く唯一の慰めでありました。しかし、ふっと家族のこと、職場のこと等を思っではしんみりとなったり、悲喜交々でした。

こんな毎日が続ぎ、バイカル湖・イルクーツクを經由して二十六日目の十一月二十二日夕方、ようやくカラガンダ駅に着きました。そして雪の中を夜行軍となり、明かり一つ見えない雪野原を黙々と歩きました。落伍者も出ました。遠くに電灯がチラチラと見える、「目標はあれだろう」と元気づく。しかし行けば行く程方向が変わり、がっくりしながら歩く。こうして翌朝四時頃目的地の収容所に着きました。

そこはカザフ共和国のカラガンダ第一収容所と呼ばれ、室内には二段ベッドが並べてあり、ペチカも焚いていました。一眠りするともう外は明るく、ドイツ軍捕虜が

隊伍を組んで作業に出るところでした。

私共に食券が配られたので食堂に行くとい入口には二メートル位の額にスターリンの肖像が掲げてあるのにびっくりしました。炊事夫は皆ドイツ人で、ソ連の定食の内容は、黒パン（八センチ角、厚さ一・五センチ）一枚、大麦のかゆ（のり状）が飯盒の外蓋一杯、野菜のスープが飯盒に三分の一位でした。

この収容所では一か月間、適当に体操をしたり、慰安会等で専ら休養でした。そして二十年十二月今度は第十収容所に転送され、翌日から作業に出ることになりました。

ここでは、ドイツから運ばれて来る戦利品の大小鉄管・レール・パイプ類・運搬用の小機関車等を貨車から下ろす作業でした。五十分しては十分休憩の八時間労働でしたが、夜間に列車が入って来て作業をした場合は、適当に時間は調整され八時間外の作業はほとんどありませんでした。

貨車が入らないときは、下ろした品物をトラクター・自動車・または人の力で、ミニ飛行場のような広い所に

適当な間隔をとり整理する作業等で、これがおおよそ一年続きました。

当時の私共の服装は、日本の軍服に防寒帽・防寒靴でシベリアの寒さには堪えられないもので、これには苦劳しました。しかし五・六月頃になると雪どけ期に入り、気候もよく上着も脱ぐ程になります。そうすると、監視の眼を盗み、種々の材料を利用して、碁石・碁盤・麻雀の牌ばいをつくりました。また、アルミ板でスプーンをつくってはソ連人に売ったり、煙草と交換するなど、作業場へ行くさやかな楽しみもできました。

収容所へ帰れば碁・将棋・麻雀もできるようになり、果して日本へ帰れるのか帰れないのか暗黒の抑留生活の中でこれだけがただ一つの娯楽でありました。

次に行ったのは、何の予告もなくトラックに分乗し、どこに行くとも知らされず真夜中に雪の中をひた走りに走って着いた炭坑地帯で昭和二十一年九月の末頃です。

ここでは、今までと異なって水道や建築工事・砂利採取・煉瓦・カーバイト製作・道路工事・炭坑の坑木整理等々でした。そして、ここで始めてノルマ制度に出会

いました。私共に与えられたノルマを完遂したら百%となり、その中の八十%が収容所の経費、二十%は給料として支給される仕組でした。でも作業場によっては給料とまでいかない所、逆に炭坑や砂利採取等は百三十、百四十%にもなり、かなりの給料となりました。そこで、話し合いによって作業所を交代し、何とかみんながお金を手にするようになりました。

金が無くても一定の食事を与えられるので何等困ることではないのですが、収容所にマガジン（売店）があつて、パン・煙草等を売っていて不足する分を求めることができるようになっていたので便利でした。

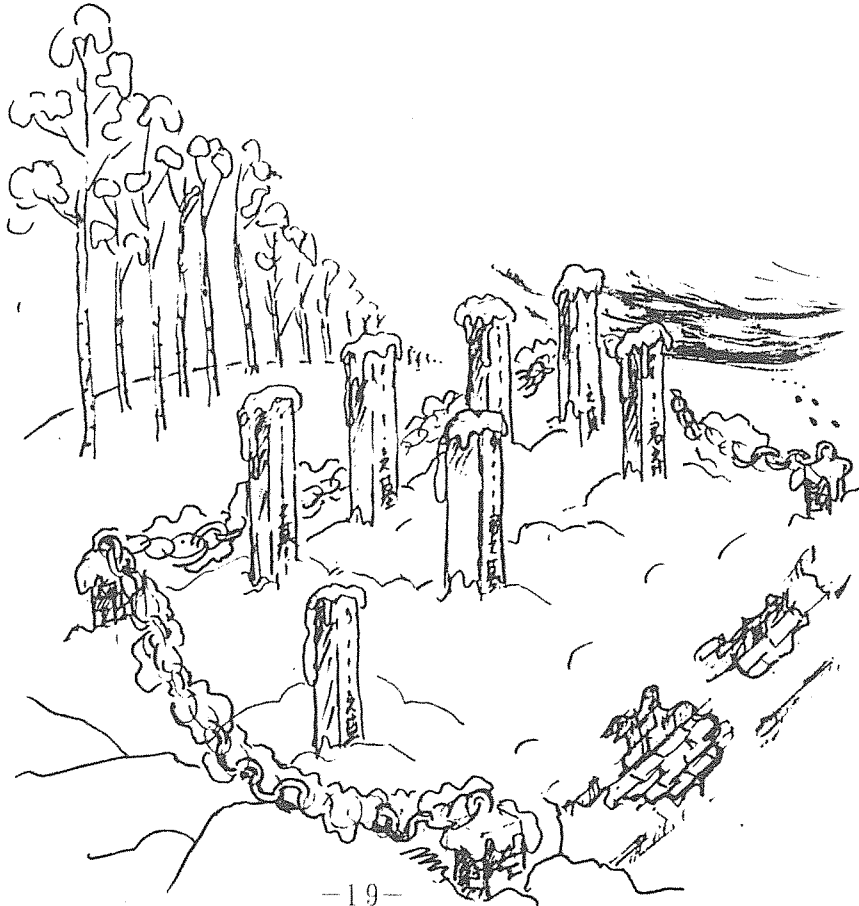
ここでは、ほとんどの作業が昼夜三交代となりました。気温が零下三十五度以下になれば作業は中止、風速三十メートルの大吹雪となればこれもまた中止となりましたが、きびしい土地の作業の連続でした。しかし、前の収容所と違ってシューパー（毛皮の外套）に防寒靴が貸与され大分しのぎ安くなりました。

辛い・長い・不安な収容所生活の中で、たくさんのソ連人と接して数多い思い出もあります。

ソ連の労働者と夜間作業一緒にしていたときのことです。月がこうこうとさえているので手を休め眺めていると「日本にもこんな月があるか」と聞きます。「日本には二つある」と私がいうと、「オオーッ」とわざとびくくりした顔をしてみせました。ソ連人は本当に柔順でユーモラスな面を持つ民族と私は思うことしばしばでした。

私共が第二十二収容所に移って来て二年が過ぎようとするころでした。当時の収容所長はソ連軍の中尉で抑留者にきつく当たることはないのですが、私共に支給される煙草の半分をピンはねするのでした。それで日本代表がカラガンダ地区の最高行政機関に訴えたところ、即刻中尉の階級は剝奪^{はくだつ}されマガジンのパン切りに格下げとなりました。処罰の厳しさにびっくりしたものです。

その中尉の後任に今度は少佐が来ました。この人は、作業班が門を出る時は門に立って作業員の服装に眼を配り、もし靴の悪い者がいたら取り替えさせる。それは凍傷を気づかっただけのことでした。また「諸君が日本へ帰るのもそう遠くない」と励まし、作業場からレンガとセメ



ントを持って帰らせて日本人の墓地（七柱）の周囲にレ
ンガで親柱を建て、その間を鉄の鎖で張り巡らし、死者
を吊ってくれました。

ようやく日本へ出発という前日のこと、私共に収容所
から近い市内への特別外出を認めてくれたので、連れ
立って国営バスに乗ったことです。手前の停留所
で仲間が二・三人料金を払って下車しました。ところが
一人の老婆が運転手にやかましく言い出したのです。

「この道は日本人が造ったのだ。料金を取るわけにはい
かん」という意味のようでした。運転士と老婆との問答
に私はびっくりしましたが、その老婆の気持ちにありがた
さを感じ、私は心の中でお礼を言いました。

昭和二十四年十月四日、いよいよ列車で出発、同十九
日ナホトカに着きました。往くときは二十六日間かかり
ましたが、帰りは十五日間でした。ナホトカに着いたら、
あの収容所長も来てくれてあいさつをしてくれ、また新
しい防寒服と着替えさせてくれました。

足かけ五年のソビエト抑留生活は本当に長く厳しいも
のでした。また数多くのソ連人とも接し、考え方・生活

・文化等の違いを知りました。元気で帰った昭和二十四
年十月末からずい分と年月が経ちましたが、私は若い時
代のソ連抑留生活が今もなおはっきりよみがえってきま
す。

第三部 空襲

空襲

東平原 福 永 ミサオ

昭和二十年五月のある日のことです。毎日毎日の空襲で外出も出来ず家にこもるのみの日々でした。当時主人は満州の方に召集されていましたので、私は覚照寺の坊守として留守をあずかり、夫の母と子ども四人で生活をしていました。

ちょうどその日は、川南平田地区に葬儀があり朝十時頃家を出て鬼ヶ久保から国道にかかった頃のことでした。その当時は国道には大きな松並木が続いていました。空襲のないことを念じながら行く途中とうとう十一時前空襲が始まりました。

蚊口の方へ次々と敵機は私の上を通ります。私は松の本の根元に隠れながら残した家族の無事を祈っております。それはそれは長い時間でした。

やがて空襲も静まりやれやれと行く途中、村の方々が

敵機から落とされた紙片を見ておられるのに出合いました。それは米兵と日本の子供が仲良く写っている写真です。また別の紙片には、「ナカヨクシマシヨウ」。降参しなさい。」と、書かれたものでした。

急ぎ足で平田の家に着いたのは午後一時過ぎ、村の方々と手を取りあつて泣きながら無事を喜んだことでした。

葬儀も終わり五時過ぎ自転車で送っていただき小丸橋まで来ると、橋のたもとまで四人の子供が迎えにきていました。「ばあちゃんは大丈夫」

と聞き、走りながら無事家につきました。長い長い恐ろしい一日でした。



空襲

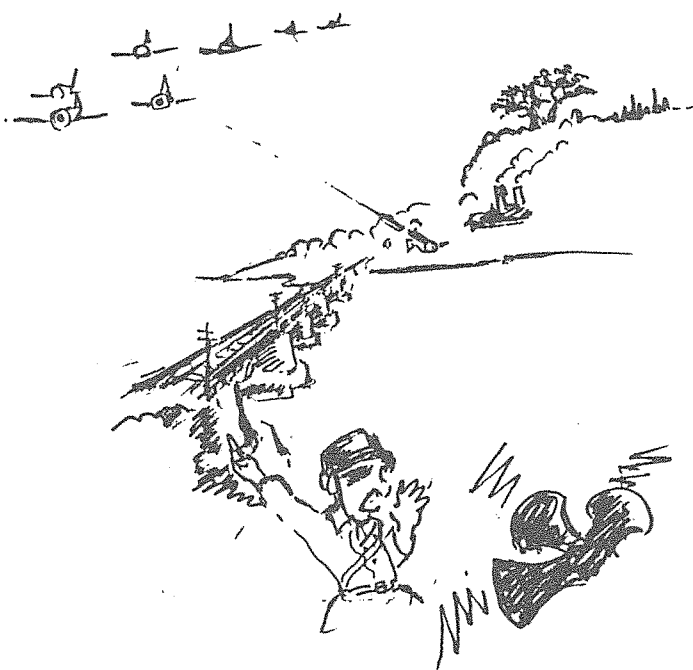
鳴野老人クラブ 寿会

ラジオが空襲警報発令を告げる。同時にサイレンが鳴る。隣保班長の「退避、退避！」と叫ぶ声、あわてて電燈を消し、家族全員急いで防空壕に退避する。時には空襲警報発令と同時に敵機が飛来して、あわてて退避することも度々であった。退避中は息をこらして敵機の去るのを待った。退避中敵の爆弾投下によるすさまじい爆発音。パリパリという機銃掃射音が聞こえて気味が悪かった。空襲警報が解除されて防空壕から出てあたりを見廻し「ああ今日も命があってよかった」と思う毎日であった。

昭和二十年三月二十五日沖縄防衛線の一角である慶良間列島に敵が上陸して戦局が最悪の事態を迎えた頃から敵の空襲が度々繰り返された。最も激しかったのは六月から八月の終戦前までであった。

各家庭に防空壕が設備され、生命の安息所であった。敵の焼夷弾攻撃に対しては家屋の天井を取り除き、ばけ

つに水を入れて備え、隣保班で消火訓練も度々行われた。外出の場合は必ず防空頭巾を携帯した。学校の生徒も勿論必ず防空頭巾を携帯して登校した。登下校する道路の脇にはところどころタコツボが掘られ、登下校途中敵の空襲に備えたものである。



農家は食糧増産に全力を尽くし人手不足のため学徒動

員による加勢も度々であった。

六月は田植えの最盛期である。馬で水田の代かきをしている時空襲警報発令でサイレンが鳴る。すばやく馬を木陰につなぎ退避した。時には敵機を見てあわてて退避することもあった。敵機に馬が驚き飛びはね、後で馬を探すのにひと苦労したこともある。田植も空襲のあいまに一株一株植えるのでなかなかはかどらなかった。

鴨野地域は、敵の空襲を度々受け各戸相当の被害があった。爆弾のため吹き飛んだ家屋が一軒、焼夷弾で火災になり消失した家屋が五軒あったが敵の弾によって死んだ者はいなかった。今も敵の機銃の弾痕が家に残っている。蚊口地域も敵の爆撃と焼夷弾によって家屋がずい分と被害を受けた。また、それに輪をかけて激しい台風が二回も襲い苦しめられたものである。

猛爆下の塩田作業生徒隊

家床 永友 千秋

戦時下諸物資は極度に欠乏、ついに食塩供給も止まってしまった。食塩は食糧のなかでも欠かすことのできない戦力である。高鍋は幸いにも海岸があるから塩をつくって奥地にも送ってやろうということになった。六月になると高鍋（現高鍋東小）・上江（現高鍋西小）両国民学校生徒がこの大仕事を引き受けることになり、高鍋校は蚊口浜、上江校は鴨野海岸で製塩を始めることになった。両海岸とも入浜式塩田に適しないので、砂層還流式塩田を造ることにして、深江の田圃から粘土を運び上げていた。五年生以上の男子六十数名の生徒隊が毎日玉の汗を流していた。

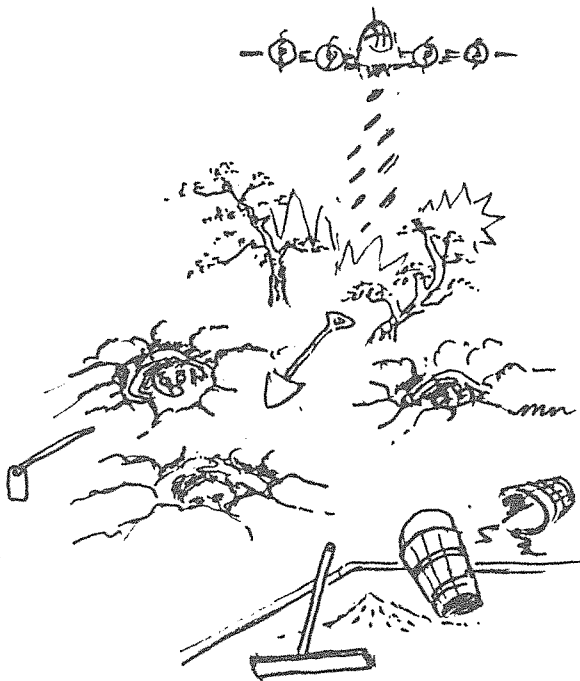
六月二十九日午前九時、空襲警報発令、やがて米軍B29の大編隊が南東海上高く進入、尾鈴山方向に飛んでいった。「今日も北九州行き定期便じゃが」と空を見上げながら平気で作業を続けていると、以外にも茶臼原上空あたりで急に東に向きを変えて高鍋に来襲、小丸川鉄

橋に大型爆弾を集中投下し、上空を旋回しながら前後約一時間半にわたり波状攻撃をした。鉄興社前の高射砲と鳴野川岸の海軍機関砲陣地からは、日の丸の向う鉢巻で勇敢に砲撃を加えたが残念ながら命中しなかった。小丸川鉄橋は三か所もガードを落され、破損箇所も多く、鉄橋近くの中州には数えきれない程のすり鉢状弾痕が残されており、川口付近の保安林松林は跡かたもなく吹き飛んでいた。

そのすぐ北の松林には私ども塩田作業隊員六十余名がタコツボの中で歯をくいしばってやがて死ぬものと観念していたのである。以前からこの危険を予知していた私は、作業隊のために安全な掩蓋壕^{えんがいこう}を設置してほしいと再三にわたり学校長に要請していたのであるが、一向に実現しないので、たまりかねた私は生徒たちを指導して昼食休み時間に各々自分の入るタコツボを掘らせ、待避の要領を教え繰り返し練習したのである。

思いもよらず翌日がこの大空襲で早速役立ったことになった。生徒たちは前日の訓練通り大急ぎで各自のタコツボに入り、しゃがみこんで目と耳を押さえ歯をくいし

ばって、爆弾の破裂する度に地震のように地がゆれ、グワサグワサッと崩れる外壁の砂に下半身埋もれながら、泣き出す者も逃げ出す者も一人もなく、一人一人が皆よく一時間半を耐えていてくれた。



ようやく敵機が退散してタコツボから出てきた隊員の人員点呼をして、全員無傷で揃ったのを確認した時、有難涙が止めどもなく頬を伝った。

生徒達が誰言うともなく爆弾の破片を拾い始めた。青龍刀のような大型のものも多く、鉈や小刀のような鋭い刃のものが無数にあって、僅か二、三分間にこえじよけ山盛り程も集まった。腕より大きい松の枝も沢山散らばって、まるで台風の跡のようだった。爆弾が破裂すると「ヒュルヒュル」と音がしていたのは、この爆弾の破片が雨あられのように飛んで来た音だったと知ると、唯一人の軽傷者さえ出なかったことはむしろ不思議な程で、神仏の御加護であったのだと有難い限りだった。この猛爆が終ると父親やじい様たちがかけつけて安否を確かめながら泣いておられた。

防空壕と風呂の中

宮越 重 永 俊 夫

昭和二十年戦争が激しくなるにつけ、宮崎県下でも空襲を受けるようになってきた。

夜の十時頃だったろうか。ラジオが「今延岡が空襲を受けている」というので外に出てみると、北の空が真赤になっている。私は、「いよいよ近くまで焼かれるようになったか。大変だな」と思った。

そうこうするうち三月ともなると艦載機が飛来し、至る所を攻撃し損害を与えるようになってきた。空襲がある度に私達は防空壕へ走らなければならなくなった。

私の家では隣の家の防空壕に入れて貰っていたが、当時五歳の長男は空襲警報のサイレンが断続して鳴りだすと、母から作ってもらったリュックを背負い隣の家の防空壕へ走りこむのがうまくなっていった。

また、度重なる防空壕避難を経るうちに、長男は壕の中へ入ると安心するのであろうか、いつしか心地よい寝息を聞かせるようになっていった。空襲の怖いひとと

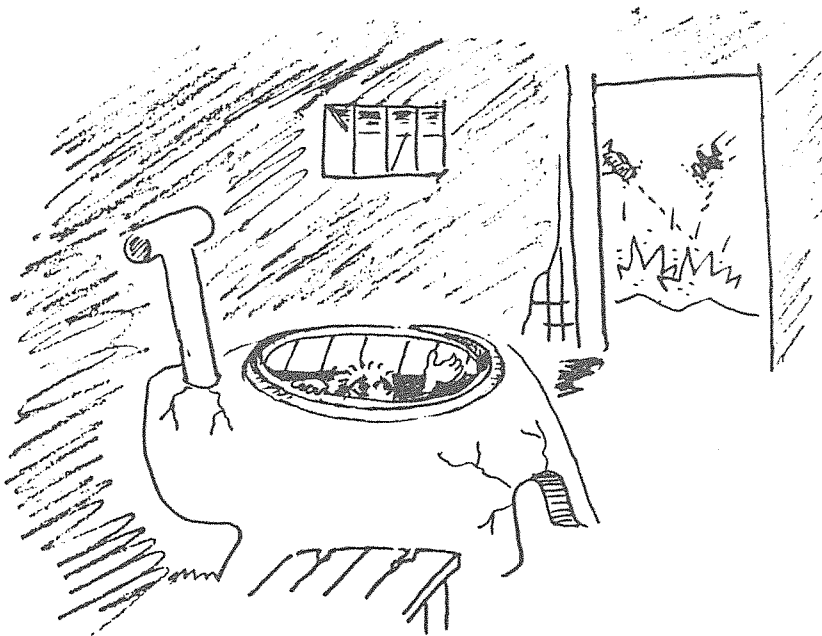
き、我が子の壕へ走り込む姿と壕の中での寝息きは、今でも我が家のなつかしい昔話である。

我が職場にいて空襲にあったある日のことである。サイレンが鳴ると同時に敵機の爆音がし、やがて頭上で機銃の音がし始めた。私は同僚と共にあわてて防空壕へ一目算、かけこむと同時に戸を閉め息を殺した。敵機の攻撃は私の頭上を何回となくかすめて行われ壕から出ることは出来なかった。

やがて敵機の爆音がしなくなったので外へ出てみると黒木さんが藤棚の下に腰かけようとしているところであった。私は深呼吸をし、長かった空襲の終わったのにほっとした。

そのうち同僚数人も集まり、激しかった空襲の様子、個々人の避難や怖かった思い等を三々五々話し合い、落ちつきを取り戻していった。そのときである。黒木さんが、「河野さんがおらんど、どしたっじゃろかい」と言いだした。私が「河野さーん……」と大声で呼ぶが返事がない。「河野さんはやられたっじゃねえどかい」みんな河野さんの安否を気遣い呼び始めた。三度・四度一斉

に呼んだときのことである。「おーい、ここじゃ」というかすかな声が返ってきた。



私達は、その声の方へ走った。そして風呂場の近くへ

行ってまたみんなで大声で「河野さん、どこのよ
おー」と呼びかけた。河野さんからは全く返事がない。

近くに倒れてもいない。私はてっきり敵機にやられたと
思った。みんなもそう思い心配そうな顔付きで探しだし
た。

とそのとき、五衛門風呂の方向からゴトゴトと音がし
てきた。みんなの目がそっちへ向いたとき風呂の蓋が上
下に動きだした。そして、手が見え、やがて河野さんの
顔が出た。「仕事をしちよったら防空壕に避難すつとが
間に合わんで風呂ん中へとびこんだつよ。えへ……大
騒ぎさせちすまんこっじゃった」と言いながら舌を出し
唇をクルクルとなめられる。そして右手で頭をかき廻さ
れる。そのしぐさは河野さんの癖であり、それを見たみ
んなは河野さんの無事を知り、しかも怖かったあとでも
ユーモアを捨てなかった河野さんに拍手をおくった。

本庄での戦争の思い出

道具小路 松岡 美也

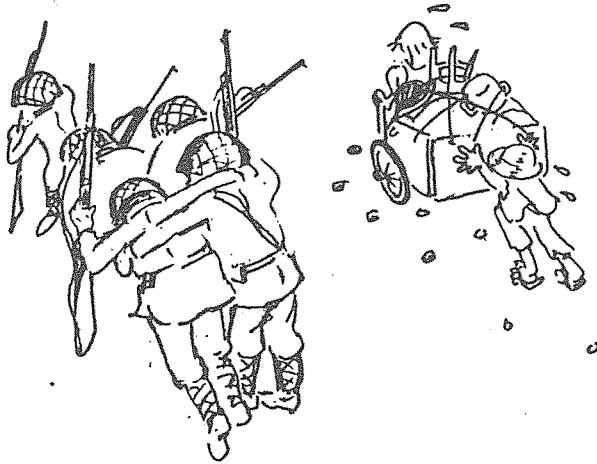
ラジオ放送による威勢の良いニュースも何となく旗色
のかんばしなさを感じるようになった昭和二十年夏のあ
る日のこと。空襲警報と殆ど同時に敵機が低空でけたた
ましい音をたててやって来た。私は夢中で庭で遊んでい
た四・五人の子供たちを追い込むようにして防空壕に
入った。そして壕の中を見廻し家にいた三歳の次女を連
れて来ていないことに気付き、夢中で家に戻り次女を連
れて壕に走り込んだ。とたん大きな爆音をすぐそばで聞
いた。てっきり農学校がやられたと、生きた心地もしな
かった。解除になって出て見て学校は無事であることを
知りホットした。このときは私の所から四・五キロメー
トルも離れた所だったのにすぐ頭の上に落ちたようなも
のすごい音だった。

何となく雲行きがあやしくなったと思われる頃のある
日のことである。どこからともなく敵機が本庄の上空に
現われ旋回をして東の方向へ飛んで行き急降下をした。

「どうしたのだろう墜落かしら」と思ったら敵機は急上昇し、そのあと黒い煙がモクモクと立ちのぼり、又次の敵機が、その次がといった具合に爆撃を加えるのを見てただただ呆然とし、「あそこの人達はどうなっているのだろうか」と思うのみだった。あとでわかったことであるが、宮崎の橘通りの大空襲を私は本庄の高台の家で見えたのである。

いよいよ終戦ともなると、日本の兵士が隊をなして疲れた様子で何処かへ移動して行き、弱り切った兵士は戦友に助けられようやく歩いている様子を見た時は本当に御苦労様と心の中でいった。

又終戦の声を聞くと「アメリカ兵が上陸して住民に危害を加えるそうな」といった流言もありビクビクさせられたものである。また宮崎方面からリヤカーに荷物を積んで避難して行く人達も見た。こうした思い出は一生わすれることは出来ないであろう。戦争はあってはならないと思う。



高鍋最後の天空襲と

永友家母子の死闘

家床 永友 千秋

八月八日早朝鳴野分散教場に出勤。午前九時過ぎ予想通り空襲警報で、急いで児童達を家に帰して自分も一応帰宅。学校に報告に行こうとしている時、日向灘洋上からいつもに倍する数十機の艦載機の大編隊が来襲。早速母は孫達をつれて横穴壕に避難した。

全くの無防備になっている高鍋に傍若無人の超低空で、千羽鳥が乱れ飛ぶが如く轟音をとどろかしながら町内至る所を無差別に乱射乱撃を始めた。小丸川鉄橋は縦に飛んで爆弾を投下、駅やアルコール工場や鉄興社は五十キロ爆弾投下が見えて黒煙がもうもうと立ち上っていた。家の周りではバリバリバリという機銃の音とバーンバーンという瞬爆実包の破裂音が響きわたっていた。母が叱るのも聞かず横穴壕の入口土塁の上で終始この状況を見ていた私には、搭乗兵がこちらを見て笑っているように見えてしゃくでたまらなかった。

執拗に乱撃が続いている時、ふと気が付くと牛小屋の屋根の端に三メートル程の炎が上っている。「くそっ、焼夷実包の火だ。」幸いにも泉水池に水は満々、唯一発で発火点を消してやると力一杯ぶっかけるが、バケツの水は日頃の練習と違って何度かけてもうまく的中しない。ふと住宅は大丈夫かと気にかかって中の間の前までつつ走り障子を開けると、正面靈壇の真上の屋根裏にも同じような炎がもえ広がろうとしているではないか。（もし天井板をはがしてなければわからなかったのだ。）

牛小屋と住宅の両方に火をつけられているのに消し手は私唯一人、一方を消しても他方の火が燃え移るのは必定。敵機の乱撃の最中に誰一人応援に来てくれるはずもない。一瞬あきらめる外はないと思ったが、何くそ負けるものと牛小屋を捨て、住宅の火を消すことに立ち向かおうと決断。猛然と泉水池の水を汲んで来ては屋根裏に投げ上げたが、高くて容易に届かない。急いで梯子をかけてみたが思うように注水が火元に当たらない。すっかり困っている所に、横穴壕に私が帰って来ないので心配して外に出てみて出火に気付いた母が、機銃乱射の中を

ものともせず、気丈に加勢にかけつけてくれた。

意を決して家の外にまわり、茅屋根によじ登り、ここぞと思う発火部分を外から引き抜き投げ捨て始めた。一握り又一握り、ボーッボーッと炎がついてくるので火傷しそうだが、燃え広がるのと抜き捨てるのと一瞬を争う



死にももの狂いの死闘である。軒下では抜き捨てられた茅の燃え上がるのを母が水をぶっかけて懸命に消してにくれた。茅屋根に畳四枚敷程の大穴があいたところでやっと住宅の火を消しとめたことを確認して屋根から降りた。

見ると牛小屋はもうすっかり燃え広がってものすごい火炎を上げている。熱くて近寄れないので遠くから注水をはじめたところ、その炎の打ち上げる住宅のひさしの上で唯一人、濡れむしろを持って飛んでくる火の粉を打ち消し打ち払いながら住宅に燃え移るのを防いでいてくださる人がおられた。家床の永友与助おじさんだった。

「与助おじさん、おおきに！」私はやっとそれだけのお礼の声をかけて牛小屋の火に水をぶっかけ続けた。敵機は尚も家の上を旋回していた。

「先生の家が火事だ火事だ！」と裏山の待避壕に居た護路部隊の兵隊たちが駆け降りて来た時は敵機は洋上はるか退去してからであった。村の人達もこの大空襲で防空壕の中におられてこの火事のことには気付かれなかったとのことだった。

牛小屋は致し方なかったが住宅は守りおおせ、幸いに

家族六人は皆無事だった。それにつけても泉水池を造っておかれた先祖の御加護、女ながらも機銃弾雨下をもものともせず消火に奮闘した母、猛火の中で必死の御援助を戴いた永友与助おじさんの御恩は終生忘れることはできない。

この日高鍋では蚊口浦と下持田の被害が特に甚大であった。アルコール工場と鉄興社は当分生産中止となり、小丸川鉄橋は五か所もガードを落とされて国鉄は普通となった。蚊口では円浄寺をはじめ六戸が全焼、下持田では四戸全焼、あちこちに数条の黒煙が立ち上がっていた。町内では多くの家に弾痕が残っていた。私の家でもひさしに径一五〇センチの瞬爆機銃弾の炸裂穴、物置土壁に弾痕三発、物干竿に二発、屋根の合掌や屋中竹にも無数の弾痕で屋根替えの人夫達を驚かした程だった。茅葺き屋根は特にねらわれたらしかった。

戦争中の鳴野

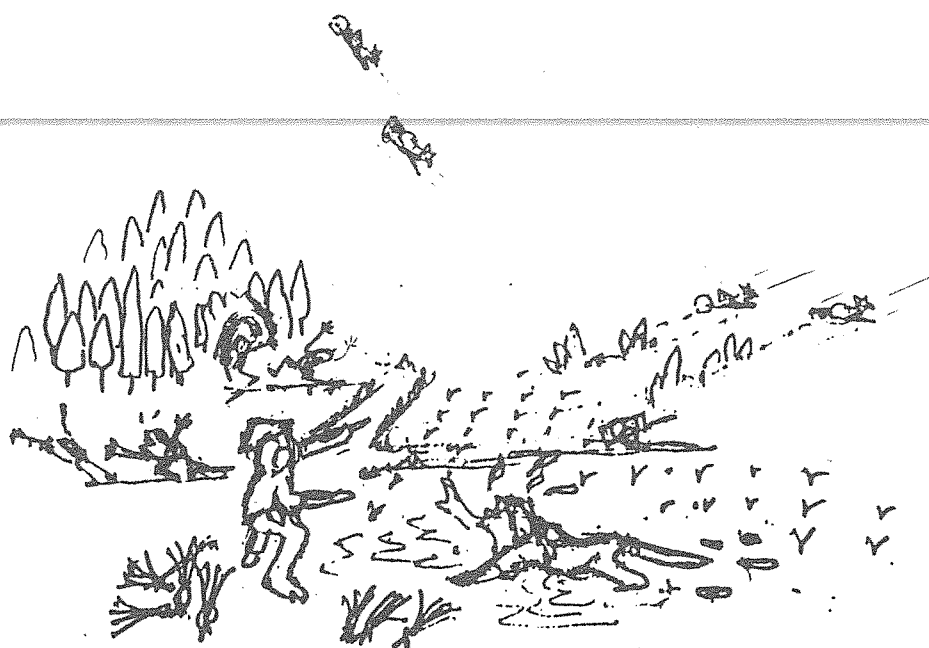
鳴野 岩 下 チドリ

森 アサエ

昭和二十年三月から、私達の住む鳴野も、アメリカの空襲によって危険な状態になった。鳴野の南対岸に鉄興社（現南九化学）・アルコール工場（現宝酒造）・高鍋駅があつて、これらの施設を壊すために敵機は鳴野の上空を機関銃を射ちながら通過するようになった。

こんな状況下にあつて私達は女手によって命がけで農作業をした。空襲が激しくなると、農家や農民にも機銃を浴びせるといふ危険な状態となった。今でも敵機から発射された弾丸が家の柱に穴をあけ、天井の板を打ち抜いている農家がある。

夜になると、電灯の光りが外にもれないように黒い布で電球を覆う灯火管制が全地域に実施され、その薄暗い部屋で食事をした。食事中に空襲警報が（サイレンが鳴る）発令されると、食事を止め電燈を消しまつ暗な中を防空壕へと急ぎ解除まで待避したものである。解除されると壕から出て食事を続けるということも度々であった。



農家は男手なしで食糧増産に努力したものである。六月は田植の真最中で忙しい時期であったが、敵機が海から低く飛んで来て急に攻撃するのであわてて近くの壕へ逃げ込む、間に合わないときは溝に伏せるという命がけの田植えであった。

七月二十八日、鳴野地区に大型爆弾が三個投下された。その頃は空襲は毎日のことと思うようになっていたが、このときは急な空襲で私達は防空壕に入る余裕すらなく、馬小屋の片隅に体を伏せた。伏せると同時に自分の体が吹き飛ばされるような爆風と爆音に合い「もう命はない」と思った程である。我にかえるとすぐ壕へ走り込んだ。

空襲が終わり壕から出てみると、辺りは黒煙に覆われ、見通しは全くつかず私達は恐怖心から、しばらくはたたずんでいた。

爆撃による被害は想像以上に大きかった。気が落ちついてからどこに爆弾が落ちたのか私達は見て廻った。

一発は、岩下宅と橋口宅の間に落ち、両家の損害は大であった。家の根石の大きなものがずい分遠くの道路ま

で飛んでいき転がっていた。

二発目は、岩下宅から約七十メートル位の水田で爆発し、深さ数メートルの大きな穴が出来ていた。

三発目は、水神様の東側の堤防に落下し、堤防に穴があき、築かれていた石は吹き飛ばされてずい分遠くの農家の屋根を壊していた。

空襲がこんなに激化し不安がましているとき、一つのうわさが流れた。「鳴野の海岸は遠浅で、敵が上陸地点として想定している」（戦後南九州海岸は沖繩に次いで上陸地点に予定されていたとわかった）と、それで、鳴野の病人や子供は木城方面に疎開するという事態になっていた。

沖繩は完全に占領され、いよいよアメリカと本土決戦だといわれ、私達も覚悟を決めていった。

しかし、八月十五日に終戦となり、鳴野は平和な今日を迎えることとなった。

空襲と台風

鳴野 山本 ミサオ

第二次大戦中、日本は、食糧の増産・軍需工場の拡充増産・各生産工場拡充に勤労奉仕作業が実施され、国民総動員の名のもとに懸命の努力をしたものである。

小学校の児童から大学の学生まで学業をやめて勤労奉仕作業に従事した。私は当時農業をしていたが、農作業に学校から生徒が加勢に来てくれて、はじめのうちは仕事もまあ順調に出来ていた。

戦争が激しくなってきた昭和二十年の正月に私は七人目の子供を出産した。当時は食糧も十分なく、乳も思うように出ず育児にも大変困っていた。そのうえ空襲下で農作業の時も生まれた子供を背負い仕事をしていかねばならなかった。

空襲警報が発令されると、仕事を止めて防空壕に走りこみ、警報が解除されると壕から出ては再び田植を続けた。このような危険と恐怖・不安の中での農作業は、なかなかはかどらなかった。子供を負って田植えをしたと

きの苦勞・不安は大変なもので今もおその苦勞は忘れられない。

アメリカの飛行機のグラマンやロッキードが、蚊口地区にある各種の施設を爆撃するために、鳴野の上空を機銃を発射しながら通過した。空襲は昭和二十年六月から激しくなった。(当時、日本では飛行機が応戦する力はなくなっていた)



ある日、空襲警報が発令されると同時に飛行機の爆音がした。私は防空壕に入る間がなく家の片隅に身を寄せて地面に腹ばいになった。その時、自分の頭のすぐ上を機関銃の弾丸が「シュッ」と飛んできた。その弾丸は、雨戸を四枚打ち抜いて転がっていた。生きた心地はしなかった。命を亡くすところであった。

次の空襲で馬小屋が火災を起こした。空襲が激しいので誰も消火に来てくれず、全部燃えてしまった。悲しさ一杯、ボンヤリ眺めていた。

八月上旬になり、切原に疎開していた病気の母が永眠した。激しい空襲で、昼間は道路を歩くことは危険であった。家族が手分けして、高鍋町役場・医師の手続きを終り、お寺では書類を渡され、この書類を添えて埋葬するようにとのことであった。夜になって、永眠した母を馬車に乗せ鳴野の墓地まで運んだ。埋葬地では、地区の人が四・五人土葬の穴を掘ってしてくれたので告別式を終えることができた。今考えると、誠に哀れな告別式であった。

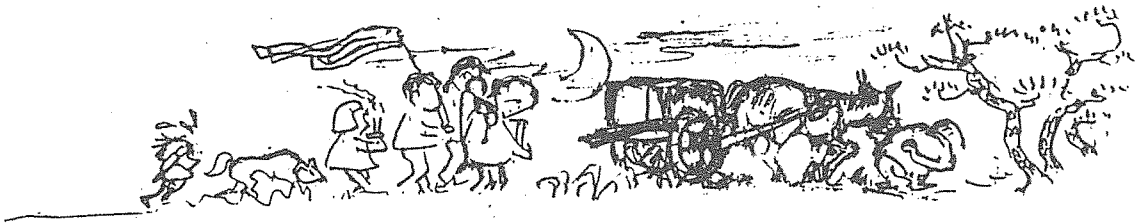
いよいよ空襲は毎日となり激しさは増していった。そ

の空襲の合間に農作業をしていた。いつ、上から不意にグラマンがやって来て機銃を浴びせられるかわからない危険とその不安では、仕事も効率は上がるはずはなかった。子供の世話・教育から火事・農作業と苦勞が多いのに、更に空襲下で働いてきたことを思うと生きているのが不思議なくらいである。

家族が多かったので食糧不足であった。雑穀・野菜を沢山混ぜて食べていた。ある時はおかゆですませたこともある。いろいろと創意工夫して生きてきた。

八月十五日をもって戦争は終わったが、それからも苦しい生活をせねばならなかった。

終戦後、激しい台風が九州を襲った。私の家もこの台風でゆれ始めたので、危険を感じみんな防空壕に風雨の中を避難した。と同時に家屋は吹き倒されてしまった。ま



たまた命の助かったことに感謝した。吹き倒された家が鳴野にも四軒、傾いた家は多数という激しい台風であった。倒れた家は、当時物資不足で建てるのに困難があったが、戦後の後始末のために残っていた旧兵士四・五人によって私の家族が住める程度のそれこそ小屋を建ててもらった。感謝しつつ家族で住むようになった。

しかし、またもや第二回目の激しい台風がやってきた。建ててもらった家は丈夫な家ではなかったので、その激しい台風のために再び家が動きだした。家族全員防空壕に避難しようとしたが、父だけがどうしても応じない。しかし家が相当揺れるので危険を感じ、父を無理やり家から連れ出した。その途端家が吹き倒された。またしても、家族全員無事であった幸運をしみじみと感じたものである。

思えば、空襲で馬小屋が焼かれ、家屋も

二回吹き倒された。このような悲惨で危険な状態から生き抜き、現在健康で老後の生活を送っている。

子供達七人も健康で夫々家庭を持って楽しく暮らしている。

初めて経験した戦争の恐怖と悲惨さは今でも忘れることができない。戦争は起こしてはならない。してはならないと身を持って感じ、将来永遠の平和が続く日本であるように祈るものである。

母の一言「先祖のお墓の前で

立派に死んで見せる」

家床 永友 千秋

昭和二十年六月二十三日沖繩守備隊ついに玉砕、七月になると殆んど連日B 29かB 24又は艦載機の空襲、宮崎や都城も焼夷弾で焼き払われ、軍施設も破壊され、飛行場はすぐにでも米軍に使われる。次はいよいよ宮崎県海岸上陸が必至であると予想された。

私は学校長によばれた。「県知事の命令一下、国民学校児童は直ちに難をさける為小丸川沿いの山路づたいに、みかど神門・どがわ渡川方面に緊急避難疎開することになる。内密裏に準備を進めてくれ。」との密命があった。

いよいよ来るものが来た。遠足や旅行とは違う。早速岩切・児島両訓導は現地と経路の実地調査に急行した。

私は食糧等の運搬用リヤカー・手車・炊飯用大金・鍋等の借用計画を立て、児童には内密にせおいぶくろ背負袋を用意させた。出発は地区単位に夜間行動を予定した。敵の上陸作戦が開始されたら、艦砲射撃は奥地までもものすごく、敵